

## 二月八日・十二月八日の行事 徘徊する一つ目の妖怪は厄神か

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



笹神様に赤飯を供える



軒先に掲げたメカイカゴ

近年は農作業にまつわる年中行事がすっかり行われなくなった。機械化が進み、農薬や化学肥料の発達などで農作業の形態がすっかり変わってしまった。農作業の節目ごとに行ってきた「神ごと」を行う時間的余裕を失い、また意味合いも薄れたことによる。そうした忘れ去られたことのある年中行事の一つに二月八日、十二月八日の行事がある。これらは対になった行事であり、ダイマナコとかコトヨウカ、コトハジメ、コトジマイなどと呼ばれる。

ダイマナコとは、大眼であり、この日やつて来る一つ目の妖怪を、大きな目をたくさん山持ったメカイ籠で威嚇することからついた名である。一方、コトヨウカとは、ともに八日に神ごとが行われるところからついた名であり、コトハジメとは、二月八日から一年の神ごとが始まり、コトジマイとは十二月八日で神ごとが終わるとの意である。

ところで宇都宮など栃木県史から芳賀地方、および茨城県南部一帯にかけて両日ともに笹神様と称する笹飾りを作る風習がある。それも二月八日は母屋の前面に、十二月八日は母屋の背後に作るというのである。この笹神様とは長さ六六・七センチほどの笹竹を三本、三角錐状に立て先端を丸め束ねたものである。そして宇都宮辺りでは先端の笹の上に赤飯を供え、また、芳賀地方では下部に膳にお神酒、赤飯などを乗せて供えたものである。

文化庁ではこうした笹神および笹神にまつわる二月八日・十二月八日の一連の風習に着目し、貴重な民俗文化財として平成十二年、「北関東のササガミ習俗」を記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として選択したのである。

その後の調査の結果、二月八日、十二月八日の両日やつて来るという一つ目および笹神様の全容が明らか

になった。一つ目は、小僧とも妖怪ともまた厄神ともいわれる。そしてその一つ目を威嚇するために先のメカイカゴを母屋の軒先に掲げる他、戸口に串刺しにしたニンニク豆腐やヒイラギの葉を飾る等の風習を確認することができた。

ともあれ一つ目は、農作業開始を間近にしてやつて来る田の神に代表される農作業の神様であった。それが一つ目とされたのは、神様は畏敬の念を持って捉えられるところから、普通の人間とは異なつた姿をすると考えられてきたことによる。その畏れが、やがて恐れとなつて災いをもたらす厄神とされてしまったということである。

したがってメカイカゴもヒイラギも本来は、やつて来る神様を招く目印であり、ニンニク豆腐は神様を招く場のケガレを独特の臭いで祓うものと考えられる。一方、笹神様は、神様をお迎えする施設、つまりは神社や祠と同じものであり、それが一時的にお祀りすることから簡易なものとなったのである。今でも農家などに薬で作った社、いわゆる薬宝殿を見ることができると、それと同じ類の極めて原始的な祭祀の施設、それが笹神様だったということである。

年中行事をはじめ民間信仰に伴う風習の中には、本来の意味合いが分からないものが少なくない。その謎を解き明かすことこそ、民俗学の醍醐味でもある。